

レッドデータブックの活用法

Q レッドデータブックは
どのように使われているの？

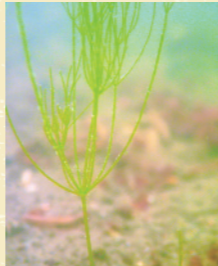
A 野生生物を守るための資料
として使われます。

- 新しく道路などを作ったり、街を再整備するために、樹林を伐採したり水辺を改変することがあります。その際に、そこにレッドデータブックに掲載されている絶滅のおそれの高い生きものが生息していることが分かれば、工事を取りやめたり、工事の方法を変更したりすることができます。その結果として、その生きものや生息環境が守られるのです。
- 自然を取り戻すための保全活動を行う際に、その地域でどんな生きものが減っているのか、また、その原因などを知ることで、より効果的な活動を行うことができます。

自然再生活動によって絶滅種が復活！

イノカシラフラスコモは、井の頭池周辺で1957年(昭和32年)に発見された水草です。しかし、周辺の都市化とともに湧水量の減少や水質汚濁、外来種の移入などによって姿を消してしまいました。

2014年から2016年にかけて、多くの都民とともに池の外来魚等を排除し、池底を天日干しにする「かいぼり」を実施したことにより、池の透明度が向上。絶滅したと思われていたイノカシラフラスコモが約60年ぶりに復活しました。



イノカシラフラスコモ

井の頭池でのかいぼりの様子
(2016年1月)



東京の野生生物を守るために私たちができること



ペットは責任を持って 最期まで飼い続けましょう

ペットを野外に放したり捨てたりしないようにしましょう。ペットで飼われている外国産の生きものや、国内でも別の地域でくらしていた生きものを野外に放してしまうと、もともとその地域の自然の中でくらしていた野生生物を食べたり、エサやすみかを奪ったり、農作物に被害を与えたりと、さまざまな問題を引き起こすことがあります。



希少種を持ち帰らないようにしましょう

自然地で見つけた希少種を持ち帰らないようにしましょう。また、希少種の位置情報をSNSなどで拡散することもひかえましょう。



身近な自然や生きものを観察してみましょう

私たちの身の周りの生きものは、いろいろな命のつながりを持ちながらくらしています。まずは、身近な自然の中で遊びながら、草花や虫や鳥などを観察してみましょう。



ボランティアに参加してみましょう

近くで行われている自然環境の保全や再生のためのボランティア活動にも参加してみましょう。

👉 都内には、身近な生きものの観察会や自然再生に関するイベントも開催されています。ぜひ、参加してみてください。

東京都レッドデータブック(本土部)2023 概要版

- 東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版 - 概要版

令和5年3月発行

編集・発行 東京都環境局自然環境部
〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話 03-5388-3548

○本編は都民情報ルームで
購入することができます。

所在地: 東京都庁第一本庁舎3階南側
電話番号: 03-5388-2276

○右記の二次元コード
から詳しい内容を
ご覧いただけます。



登録番号 第(4)77号
環境資料 第35006号

本書に掲載された写真等の情報は無断で転載・複写・複製することはできません。

東京都

RED DATA BOOK TOKYO 2023
23-ward and Tama area version

レッドデータブック

2023

本土部

東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版

概要版



東京都環境局



『レッドリスト』『レッドデータブック』とは？

レッドリストとは絶滅のおそれのある野生生物の種のリストです。これに対してレッドデータブックとは、レッドリストの解説として掲載種の生息状況などを解説し、取りまとめたものです。

東京都では、自然環境の特徴が大きく異なる「本土部」と「島しょ部」に分けて、保護上重要な野生生物種のリストを東京都版レッドリストとして作成しています。本土部におけるレッドリスト及びレッドデータブックの作成状況を下表に示しました。

今回の東京都レッドデータブックでは、保護上重要な野生生物種の保全や再生に関する取り組み事例や、東京にゆかりのある希少な野生生物なども紹介しています。

	レッドリスト		レッドデータブック	
	発行年	名称	発行年	名称
第3次リスト	令和5(2023)年 一部評価を見直し	東京都レッドリスト (本土部)2020年見直し版	令和5 (2023)年	東京都レッドデータブック (本土部)2023
	令和3(2021)年	東京都レッドリスト (本土部)2020年版		
第2次リスト	平成22(2010)年 2013年5月修正	東京都レッドリスト (本土部)2010年版	平成25 (2013)年	レッドデータブック東京 2013(本土部)
第1次リスト	平成10(1998)年	東京都の保護上重要な野生生物種 (1998年版)	平成11 (1999)年	東京都の保護上重要な野生生物種 (1998年版)普及版

東京都レッドデータブック(本土部)2023掲載種

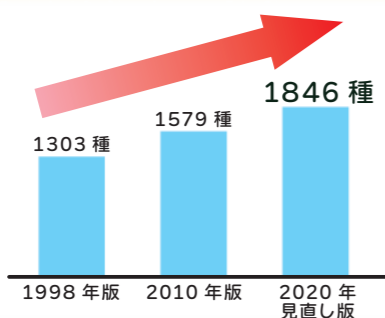
本編には「東京都レッドリスト(本土部)2020年見直し版」に挙げられた1846種が掲載されています。植物、藻類、哺乳類、鳥類など11の分類群について、種別に解説されています。

分類群	項目	1998年版 掲載種	2010年版 (2013年5月修正) 掲載種	2020年版 掲載種	2020年見直し版		
					掲載種	新規 掲載種※	削除種※
植物		642	800	941	943	177	36
藻類		対象外	対象外	31	31	31	0
哺乳類		31	37	42	42	5	0
鳥類		107	162	162	162	10	10
爬虫類		13	14	13	13	0	1
両生類		14	15	15	15	0	0
淡水魚類		37	38	52	50	19	8
昆虫類		459	394	444	445	180	129
甲殻類		対象外	15	22	22	8	1
クモ類		対象外	33	36	36	3	0
貝類		対象外	71	87	87	18	2
合計		1303	1579	1845	1846	451	187

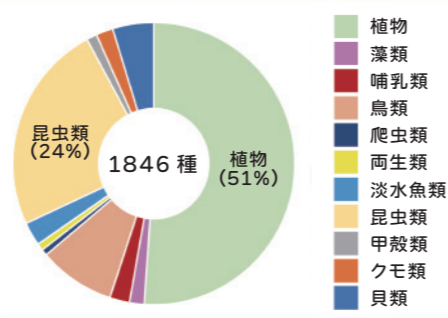
※新規掲載種、削除種は2010年版(2013年5月修正)との比較

増加する東京都の絶滅危惧種

東京都本土部レッドリストへの掲載種は、過去約20年間で増え続けています。2020年見直し版では、掲載種のうち植物が約半数を占めています。



年度ごとの掲載種数の変化

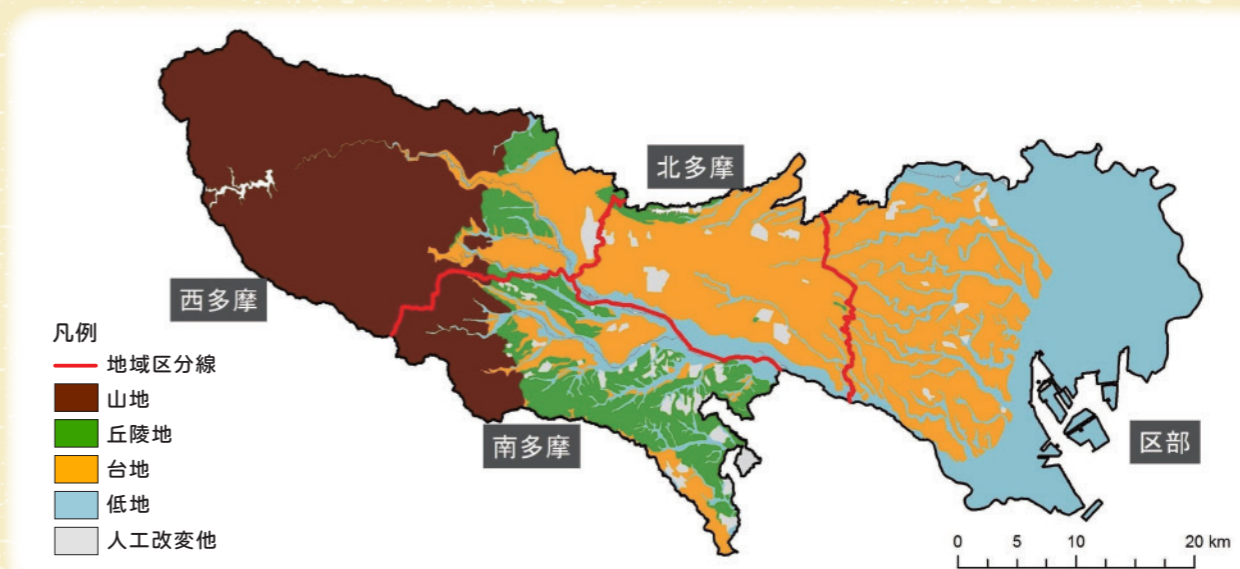


2020年見直し版の掲載種数の内訳

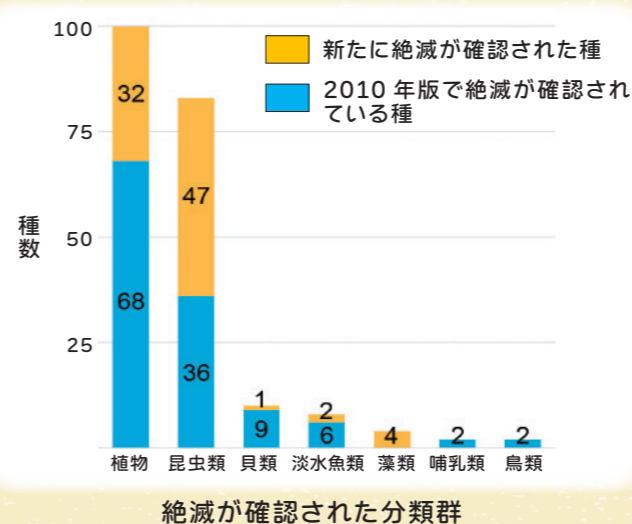
東京都レッドリストの主なカテゴリーについて

カテゴリー名称	表示	概念
絶滅	EX	過去の生息が確認されており、飼育下・栽培下含め絶滅
野生絶滅	EW	飼育下・栽培下で存続しているが野生下では絶滅
絶滅危惧I類	CR + EN	減少要因が引き続き作用する場合に野生での存続が困難
絶滅危惧I A類	CR	ごく近い将来、野生での絶滅の危険性が極めて高い
絶滅危惧I B類	EN	近い将来野生での絶滅の危険性が高い
絶滅危惧II類	VU	減少要因が引き続き作用する場合、近い将来I類に移行することが確実
準絶滅危惧	NT	絶滅危険度は少ないが条件によっては上位ランクへ移行する要素あり
情報不足	DD	絶滅危惧カテゴリーへ移行する属性があるが、情報が十分でない
留意種	*	現時点では準絶滅危惧までいかないが、容易に減少する可能性があり、動向に留意が必要

東京都本土部は地域によって環境が大きく異なり、区部(低地~台地)、北多摩(主に台地)、南多摩(主に丘陵地~山地)、西多摩(主に丘陵地~山地)の4地域に区分し、評価を行っています。(昆虫類は区部と多摩部の2区分、藻類は本土部のみで評価)



絶滅種は、2010年版から新たに86種加わり、209種になっています。



オキナグサ
(キンポウゲ科)



クロゲンゴロウ
(ゲンゴロウ科)

新たに
絶滅した
生きもの

東京都レッドデータブック(本土部) 2023 に掲載された主な希少野生生物

東京では既に絶滅してしまった生きもの



ゲンバイトンボ
(モノサシトンボ科)
東京都本土部: EX
水生植物が豊富で水質が良好な湧水地や細流、河川などに生息する。都内では、1982年の記録を最後に、絶滅したものと考えられる。



ムジナモ
(モウセンゴケ科)
東京都本土部: EX
1890年に都内の江戸川沿いにあった用水池で、牧野富太郎博士により発見された。国内の自生地はすべて消滅し、栽培下で系統保存されているだけである。



オオカミ(イヌ科)
東京都本土部: EX
都内では、檜原村や日の出町で捕獲・収集された4個体の骨の一部が残っている。明治時代までに絶滅したと言われている。

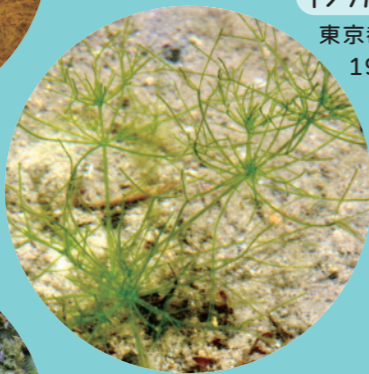
タマノカンアオイ
(ウマノスズクサ科)
東京都本土部: EN
和名は「多摩の寒葵」を意味し、産地の多摩丘陵に由来する。1931年に採集された標本に基づいて、牧野富太郎博士が命名した。



ハチオウジアサミ(キク科)
東京都本土部: EN
2003年に八王子市宇津貫町で発見されたアサミで、2012年に新種として発表された。



イノカシラフラスコモ(藻類)
東京都本土部: CR+EN
1957年に三鷹市の井の頭池や神田川上流で発見された。その後確認されなくなったが、井の頭池でのかいほりにより、2016年に復活が確認された。



トウキョウダルマガエル
(アカガエル科)
東京都本土部: EN
主に、水田やその周りの水路、浅い沼地、河川敷に作られた湿地などの水辺に生息する。都内では、水田の激減や耕作方法の変化などにより生息数が減少している。



トウキョウトラカミキリ
(カミキリムシ科)
東京都本土部: EN
1929年に東京都足立区で採集された標本をもとに命名された。近年、北多摩地区の雑木林で記録が増えている。



トウキョウサンショウウオ
(サンショウウオ科)
東京都本土部: EN
「トウキョウ」の名がつくサンショウウオで、都内では多摩地区の標高100~300mの丘陵地が主な生息地となっている。



かつては身近に見られた、希少な生きもの

ニホンイシガメ(イシガメ科)
東京都本土部: CR
外来種による捕食や交雑が生存を脅かしている。山間部の河川・湖沼に生息するが、都内では区部でも見つかっている。ペットなどの飼育個体が野外に放されることがある。



キキョウ(キキョウ科)
東京都本土部: CR
以前は都内全域に記録があったが、近年では区部で絶滅し、多摩部でわずかに残るだけとなっている。



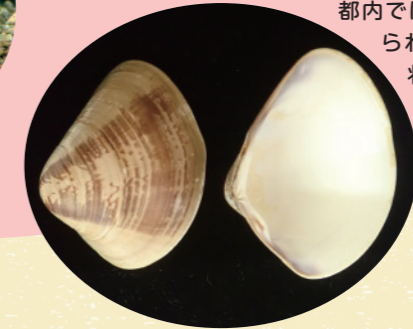
ミナミメダカ
(メダカ科)
東京都本土部: CR
外来系統との交雑による遺伝的かく乱が進行している可能性が高い。杉並区産の在来個体群が博物館等で系統保存されている。



ヒバリ(ヒバリ科)
東京都本土部: VU
以前は山地を除く都内全域で見られていたが、現在の生息地は広い草地が残る河川敷や造成地などに限られている。



ドジョウ(ドジョウ科)
東京都本土部: CR
かつては平野部を中心とした池沼や水田、水路などで見られていたが、現在は外来系統のドジョウへ置き換わっており、在来のドジョウは絶滅寸前と考えられる。



ハマグリ(マルスダレガイ科)
東京都本土部: DD
都内では、高度経済成長期まではよく見られていたが、それ以降、ほぼ絶滅状態であった。近年、水質の改善などにより、復活の兆しがみられている。



種別解説の一例

タマノカンアオイ
Asarum tamaense
被子植物 ウマノスズクサ科

■ 種の特性と生育状況: 東京、神奈川、埼玉の3県にのみ自生する常緑多年草で日本固有の植物。落葉~常緑樹林下の半日陰に生育する。葉は厚くやや光沢があり、卵円形で暗緑色。花期は4~5月、花径3~4cmで暗紫褐色の萼片は3裂し、強く波打つ。都内では、ほぼ多摩・加住・狭山丘陵に分布は限られるが区部台地の一部にも分布する。開発等の抑制により大規模な自生地消滅は抑制されたが、全体的には個体数減の傾向にある。

■ 生存を脅かす要因: 里山林の放置と植生遷移、都市化による林床の乾燥などが及ぼす生育環境の悪化が懸念される。地域によっては、愛好家や園芸目的による採取も脅威である。

■ 特記事項: 地史との関連性が強い植物であり、栽培対象とされることもあるが、自然環境下への人為的な植栽は分布攪乱につながるため避ける必要がある。

執筆者 内野秀重
文献一覧 16, 243, 271, 290, 294

確認年代 ● 2000年以降
● 1999年以前 ▲ 標本

地域ごと、調査時期ごとのカテゴリーを示しています

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	CR	EN	VU	CR	EN
2010	DD	CR	VU	●	●
1998	A	B			

多摩市 1981年4月21日

過去から現在にかけての生育情報を地図に示しています

写真が撮影された場所や日にちを示しています

東京都本土部における野生生物の減少要因

野生生物の主な減少要因は大きく分けて4つあります。

1 人間活動による影響 (第1の危機)

開発にともなう森林伐採や、農地や干潟・浅場などの減少により、野生生物の生息・生育環境が悪化しています。

都内の水田は、高度経済成長期の減反政策や都市開発をきっかけに激減し、特に区部では1980年に水田がほぼ消失しました。これにより、カエル類、水生昆虫類など水辺にすむ生きものが減ってしまいました。

年度	区部	南多摩	北多摩	西多摩
1960	3500	2500	1500	500
1970	1000	1500	1000	500
1980	500	1000	500	500
1990	200	500	300	500
2000	100	300	200	500
2010	50	200	150	500
2020	20	150	100	500

「東京農林水産統計年報」、「作物統計調査」より作成

2 自然に対する働きかけの縮小 (第2の危機)

雑木林や農地の管理放棄、森林での増えすぎたニホンジカによる植物の食害等により、植生が大きく変化し、生態系のバランスが崩れてきています。

シカによる食害は、希少な植物の消失だけでなく、その植物をエサやすみかに行っている哺乳類や鳥類、昆虫などにも影響を与えています。

ニホンジカ

写真中央に見えるのがシカの侵入防止柵
右側：シカの食害により植生が衰退
左側：シカが未侵入の森林の様子

東京におけるシカ分布確認エリアの拡大
「第6期東京都第二種シカ管理計画」より作成

3 人により持ち込まれた生きものによる影響 (第3の危機)

アライグマやアメリカザリガニなど侵略的な外来種による捕食や生態系への影響により、水辺にすむ在来の生きものが減少するなど大きな被害が出ています。

4 地球環境の変化による影響 (第4の危機)

気温上昇による生きものの分布変化や絶滅リスクの増加が懸念されています。

東京の保護上重要な自然環境の紹介

東京都本土部において、特に自然的な資質が高く、多くの絶滅危惧種が生息・生育している場所を紹介します。

2 高尾山・陣場山地域

世界的にも評価されている自然豊かな高尾山を中心に、多くの希少な野生生物が生息・生育しています。

1 秩父多摩甲斐国立公園 (亜高山帯・石灰岩地含む)

雲取山を中心に亜高山帯の植生が広がっています。また石灰岩地が分布し、特徴的な生きものがいます。

9 武蔵野三大湧水池 (三宝寺池・善福寺池・井の頭池)

武蔵野台地の標高50m付近にある湧水池に、かつては地域固有の様々な生きものがみられました。次第に湧水が枯渇し、生きものが大幅に減少したため、現在、自然環境の保全や再生の取り組みが行われています。

8 水元周辺の池沼及び湿地

かつては「東京の水郷地帯」と呼ばれるほど湿地環境が広がっていましたが、戦後、そうした環境は激減しました。近年、自然再生の取り組みが行われています。

3 多摩地域の丘陵地の谷戸群

樹林、草地、湿地、ため池、水路等の多様な環境要素がモザイク状に配置され、豊かな野生生物の生息・生育環境となっています。

4 多摩川水系中流部低地の水田及び用水路群

水生昆虫や両生類、淡水魚や水草などにとって重要な場所となっています。

5 台地の崖線と湧水群

崖線には自然度の比較的高い森林植生や湧水などの多様な自然環境が残されています。

7 都心部の大規模緑地 (皇居・明治神宮・自然教育園)

古くは江戸時代から残されてきた大規模な緑地が、様々な生きものの生息地になっており、都心の生物多様性保全の拠点となっています。

6 東京都内湾の干潟と塩性湿地群

干潟や塩性湿地が減少し、多くの野生生物が絶滅の危機にあります。そうした環境の保全や再生が生物多様性の維持向上に重要です。